

## 14. コンドロイチン硫酸鉄静注法による各種疾患による網内系機能の検討

渡辺 佳俊, 勝沼 英字  
(東京医大 老人科)  
村山 弘泰, 岡本十二郎  
(同 放射線科)

$Fe^{59}$  コンドロイチン硫酸コロイド (Fe-C. S. と略す) 及び  $Fe^{59}$  Globulinate 静注法を用いて、特に網内系に摂取されてから処理される迄の機能を各疾患について検索した。早朝空腹時、1側肘静脈に Fe-C. S. 20 mg, 10  $\mu$ Ci/ml 静注し、他側肘静脈より経時的に採血し、血漿 2 ml の  $Fe^{59}$  放射活性を測定後、0.4% リバノール溶液を加え、遠心し、上澄、沈殿の放射活性を各自測定する。前者は  $Fe^{59}$  Globulinate 活性を示し、後者は  $Fe^{59}$  Colloid clearance の算定に供した。次に Fe-C. S. 活性半減期の消失した後、同一症例から採血し、血漿分離後  $Fe^{59}$  20  $\mu$ C, 37°C 30 分培養後、患者に静注し、経目的に採血し、% R. C. U. 算定に供した。この  $Fe^{59}$  Globulinate の% R. C. U. とコロイド鉄由來の% R. C. U. から理論曲線を作成し、この理論曲線と実測曲線との間の時間的開きを Time Lag とし、この値が網内系にコロイド鉄が停滞した時間を表わし、処理能とした。

以上のごとく正常例、各種疾患計 13 例を施行した結果、動脈硬化の判定基準に合致した老年者群 (6 例) は Colloid clearance  $T^{1/2}$  は  $7.83 \pm 0.9$  分で正常者 7 分とコロイド鉄摂取能は大差なかった。鉄欠乏性貧血 7 分、肝硬変、肝線維症は夫々 11.5 分、12 分と摂取能低下の所見をえた。血漿  $Fe^{59}$  Globulinate の出現時間は老年者群  $17.66 \pm 6.23$  分で、正常者 12 分に比して遅延し、肝硬変、肝線維症、リュウマチ称関節も夫々 19.5 分、20 分、15 分と遅延した。コロイド鉄処理能 Time Lag は老年者群では  $1.93 \pm 0.64$  日で正常者 0.9 日に比し約 2.1 倍の処理能低下を認めた。鉄欠乏性貧血、肝線維症では  $0.35 \pm 0.1$  日と処理能亢進を示し、肝硬変症では  $1.6 \pm 0.3$  日と処理能やや延長を示し、更にリュウマチ称関節炎では 3.95 日と大巾なる処理能低下を示した。

次に Time Lag,  $Fe^{59}$  Colloid clearance  $T^{1/2}$  の相関は 0.19 と有意の相関を認めないが、Time Lag, 血漿  $Fe^{59}$  Globulinate の出現時間は 0.735 と正の相関を示し、 $Fe^{59}$  Colloid clearance  $T^{1/2}$  と血漿  $Fe^{59}$  Globulinate 出現時間は 0.895 と正の相関を示した。

質問： 内山先生 (千葉大 放射線)  
網内系機能をみる他の検査法にはどんなものがあるか、それに対するこの検査法の特徴、利点は?

質問： 与那原良夫 (東二)  
① 本法が erythropoiesis と RES の function が併行している場合は問題にならないと思うが、血液疾患として Hemopoiesis の亢進している場合または逆に Hemopoiesis の低下している場合果して用いられ得るか。

② コンドロイチン硫酸鉄が erythropoiesis に一部直ちに加わる可能性があると思うがその点如何。

回答： 勝沼先生 (東京医大)

内山先生への答

従来は内科的にコンゴレッド法が使われていますがこの方法では網内系機能の中の摂取能、処理能を細く分けて知ることが出来ない。この機能を知るためにはこのような方法を用いなければ分らない。従来このような目的で臨床上使われている方法はない。

与那原先生

血液疾患では緩解のときには応用出来ますが病状が進行している場合にはあまりあてにならない。Erythropoiesis の盛んな時には勿論鉄がとりこまれるのでその時には不適と思われる。この問題は目下症例を蓄積検討中です。

## 15. “Iodocholesterol の使用経験”

石井 勝己, 石橋 晃, 山田 伸明  
草野 正一, 中沢 圭治, 依田 一重  
橋本 省三

(北里大 医学部核医学放射線部)

$^{131}I$ -19 コレスチロールによる副腎 scanning はミシガン大学で開発されて以来、最近我が国でも各所で行なわれるようになって来た。

我々も今回  $^{131}I$ -19 コレスチロールを用いて、副腎の scanning を行ない比較的良好な結果を得たので報告する。

我々は成人に  $^{131}I$ -19 コレスチロールを 1 mci ~ 800  $\mu$ ci、小児には 500  $\mu$ ci を静注し、7 日目に scanning を行なった。症例は 6 例で、成人 5 例、小児 1 例、男 4 例、女 2 例で、陽性像の得られたものは、尿管結石術後 10 日目、右副腎 Adenoma (1 才 6 カ月)、「るいそう」